

立命館大学大学院文学研究科

修士論文要旨

黒人女性の「日常的抵抗」と

モントゴメリー・バス・ボイコット

西洋史学専攻 日野 彩 香

一九五五年十二月一日、アメリカ、アラバマ州モントゴメリーにおいて黒人女性ローザ・パークスがバスで白人に席を譲らなかつたために逮捕された。この逮捕によって始まったバス・ボイコットは、一般的に六〇年代に最盛期を迎える公民権運動の出発点として認識されており、運動の指導者であるマーティン・ルーサー・キング Jr. はアメリカの自由と平等を象徴する人物として記憶され続けている。

しかし、一般的に流布しているイメージとは異なり、モントゴメリーのバス・ボイコットはローザ・パークスの逮捕によって突然始まったものでも、あるいはキングが計画したものでもない。この運動が始まるまでには、黒人大衆特に労働者階級の黒人女性による人種隔離に対する「日常的抵抗」という長期にわたる経験があったのである。この論文の目的は、名もなき黒人女性の日常的抵抗に焦点を当てることにより、無関心で受動的だとされてきた黒人大衆を、組織化されない形で抵抗を繰り返してきた集団として再構成することである。そうすることによって、従来の公民権運動史研究の抱える二つの問題点、すな

わちキング中心の語りと、人種差別に対して一体となって戦う黒人という「黒人コミュニティ」の美化・単純化の傾向を修正し、新たな公民権運動史像を提示することを目指している。

第一章では、「日常的抵抗」概念の生成背景とその批判的有効性について、サバルタン研究と東南アジア政治の研究者であるジェームス・C・スコットの方法論を中心に論じている。「日常的抵抗」とは、権力の面前で話されることのない「舞台裏」の言説、スコットの定義するhidden transcriptの「舞台の上」の表現であり、この「日常的抵抗」に着目することによって、表面的な支配・従属関係の裏にある従属集団の広大な政治領域を掘り起こすことが可能となる。第二章では、モントゴメリーのバス・ボイコットを實質上支えた黒人家政婦の「日常的抵抗」の技法を、彼女たちの職場である白人家庭と、その通勤手段であるバスという二つの場から検証している。その上でバスという「場」の持つ重要性について明らかにした。第三章では、バスでの「日常的抵抗」がどのようにしてモントゴメリー・バス・ボイコットに結びついたのかという点と、運動の意義について考察している。

黒人女性の「日常的抵抗」に注目することは、一九三〇年代・四〇年代の労働運動史と公民権運動史との間に横たわる深い断絶を埋める試みでもある。大きな物語に回収されない黒人の経験を描いたこの論文を通して、日常のなかにこそ黒人の政治の真のラディカルさが存在することを実証できたのではないかと期待している。

シエラレオネ植民地化計画についての一考察

ヘンリ・スミースマンの移民計画書を中心に

西洋史学専攻 宇都木 佳子

西アフリカのシエラレオネは一九六一年に独立するまでイギリスの植民地であった。最初の移民者の多くはアメリカ独立戦争の際にイギリス側について戦った黒人たち、いわゆる黒人ロイヤリストであった。彼ら黒人の海外移民に対してはこれまで、スポンサーたちの人道主義的動機に起因する、とするものと、人種差別主義的動機に起因する、とする二つの研究成果があった。

本研究の目的は、当時のイギリスにおいて下層階級の人々にとつての海外移民の意義を問い、シエラレオネへの移民計画に重要な役割を果たしたヘンリ・スミースマンの移民計画書を考察し、さらにイギリスの対アフリカ関係を考察することにより、従来の解釈に一石を投じシエラレオネ計画を再考察することであった。

第一章では、シエラレオネ移民計画は黒人の「排除」ではなく、戦後処理の一方策として黒人ロイヤリストに対する海外移民政策として考え出されたことを明らかにした。ここでは、「黒人」であることは必ずしも「特別」なことではなかったことが理解できた。第二章ではヘンリ・スミースマンの移民計画書を考察することによって、政府、あるいは支配階級がこの計画に希求したものは、熱帯の地を支配することであり、そのために黒人を強制的、あるいは半強制的な労働者と見なし、アフリカを経済的、又領土的に支配することであったことを論じた。第三章では、イギリスが西アフリカで行った二つの活動、アフリカ

協会およびシエラレオネ会社に関わった中心的人物の思考を検討することにより、彼らの目的が、熱帯の地を支配すること、原住民を文明化することで合法貿易を行い、西アフリカをイギリス帝国の植民地システムの中に組み入れることであり、奴隷貿易廃止運動もまたその目的のための方策であったことを明らかにした。

従来の研究が明らかにしているように、シエラレオネ移民計画は、たしかにスポンサーたちの人道主義的な動機から開始された植民計画であったが、彼らの人道主義には重商主義的要素が内在していた。その結果、スミースマンの移民計画書に基づいたこの移民計画は、「白人の原理」に基づく合理性を反映し、イギリスのアフリカに対する帝国主義支配への変容を示唆するものとなったのである。

ロレンツォ・メディチのパトロネージ

学芸パトロネージに見るメディチ家支配の側面

西洋史学専攻 山崎 瑞代

一四〇〇年代のルネッサンス期におけるフィレンツェ共和国のパトロネージの研究は、その多くがメディチ家に焦点を当てられている。当時のパトロネージは、それ自身が目的ではなく、円滑な政治を運営するためや、家門を強固にするための手段と化していた。有力な家門はこぞって多様なパトロネージを行ったが、どの家門よりも大きなパトロネージの網を張り巡らすことが出来たのがメディチ家であった。それを可能にしたのは、メディチの財力とメディチ・パルチザンといわれる豊富な人材であった。

本論はロレンツォ・デ・メディチのパトロネージの中で、プラトン・アカデミーとフィレンツェ大学の復興という二つの学芸パトロネージの特徴に焦点を当てる。ロレンツォの学芸パトロネージは、プラトン・アカデミーを中心に研究がなされがちである。私はフィレンツェ大学の復興パトロネージは、より政治的な意味合いを持つパトロネージと考え、その背景を考察することでプラトン・アカデミーと同様に、彼のパトロネージの中で重要な位置を占めることを検証する。

ロレンツォは、プラトン・アカデミーに深い関心を寄せ、ヒューマニスト達をパトロネージすると共に、ロレンツォ自身も彼等達との交わりを楽しんだ。一方のフィレンツェ大学は、何度も開校と閉鎖を繰り返し、衰退の一途をたどっていた。ロレンツォは、フィレンツェ大学の一部をピサ大学に移転させるこ

とで復興を果たした。それは、従属都市ピサへの経済的な支援策の一つであると同時に、フィレンツェ共和国の大学を維持し復興させるという国家的なプロジェクトであった。

また、このパトロネージの背景には、従属都市ピサの経済支援と謳いながら、その復興資金の一部は別の従属都市ヴォルテッラから強引に取得した明礬鉱からの利益を充当させるという手法が用いられた。ロレンツォが政権を担って間もない時代のこのパトロネージは、彼の政権確立を誇示するための性急な表れともみえる。しかし、このパトロネージは国家の大学の必要性を認識したパトロネージであった。彼のこの意識は、大学の積極的なパトロネージを行わなかった父ピエロ・デ・メディチや、祖父コシモ・デ・メディチよりも近代的な感覚を持ち合わせていたといえよう。そして、ロレンツォは、大学を復興することにより、その復興策や資金運営に深く関与することで、新たなパトロネージの販路をも見出したのであった。